

1 気象概況（6月4～6半旬：果樹研究所）

平均気温は4半旬が19.8℃で平年より0.7℃低く、5半旬が18.5℃で平年より1.8℃低く、6半旬が18.6℃で平年より2.3℃低い状況でした。この期間の降水量は95.5mmで平年の116%でした。

2 土壌の水分状況（6月30日現在）

果樹研究所における土壌水分（pF値：無かん水・草生栽培リンゴ園）は、深さ20cmが2.7、深さ40cmが1.9、深さ60cmが2.0で、深さ20cmは乾燥状態にありますが、40cm以下は適湿条件の範囲です。

3 生育概況（果樹研究所）

(1) モモ

ア 果実肥大（7月1日現在）

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が48.2mmで平年比102%、側径が44.3mmで平年比98%と平年並み、「ゆうぞら」は縦径が45.6mmで平年比99%、側径が38.2mmで平年比93%と小さい状況です

また、満開後日数による比較では、両品種ともに平年よりやや大きい状況です。

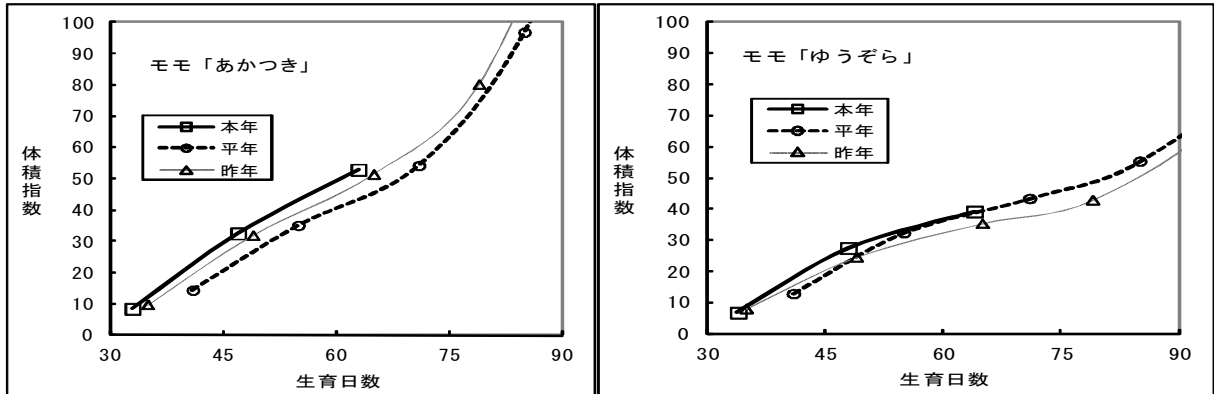


図1 モモの果実肥大（7月1日現在）

イ 新梢生長（満開後60日現在）

「あかつき」の新梢生長は、新梢長が9.9cmで平年比84%と短く、展葉数は13.8枚で平年比94%と少なく、葉色は平年比99%と平年並みで新梢停止は早い状況です。

ウ 核障害の発生（満開後60日現在）

「あかつき」の核障害は、核頂部の亀裂の発生率が45%で平年（52%）よりやや少なく、縫合面の割裂は見られていません（平年は17%）。

エ 発育予測（7月1日現在）

今年の「あかつき」の硬核期開始日は6月18日で平年より7日遅い状況でした。

また、今後の気温が平年並みに推移した場合、「あかつき」の収穫開始日は8月10日で平年より8日程度遅く、収穫盛りは8月14日で同様に8日程度遅れる見込みです。

(2) ナシ

ア 果実肥大（7月1日現在）

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が34.1mmで平年比109%、横径が40.2mmで平

年比109%と平年より大きく、「豊水」は縦径が34.9mmで平年比106%、横径が38.0mmで平年比108%と大きい状況です。

また、満開後日数による比較でも、両品種共に平年より大きい状況です。

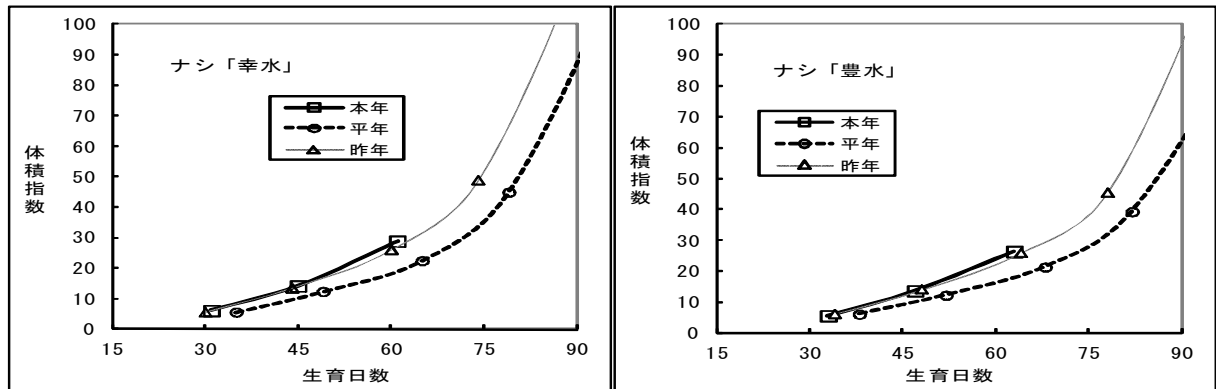


図2 ナシの果実肥大（7月1日現在）

イ 新梢生長（満開後60日現在）

「幸水」の新梢生長は、新梢長（予備枝）が101.2cmで平年比103%とほぼ平年並み、葉枚数が26.8枚で平年比102%と平年並みの状況です。「豊水」は新梢長（予備枝）が112.6cmで平年比116%と平年より長く、葉枚数が27.8枚で平年比106%とやや多い状況です。

ウ 生育予測

DVRモデルによると、裂果初発日は7月21日（満開後81日）で7日遅いと予測されます。

また、満開後36日間の平均気温を用いた生育モデルによると、「幸水」の収穫盛期は9月6日頃で平年より4日遅いと予測されます。

(3) リンゴ

ア 果実肥大（7月1日現在）

果実肥大を暦日で比較すると、「つがる」は縦径が50.7mmで平年比104%、横径が53.9mmで平年比99%とほぼ平年並み、「ふじ」は縦径が45.4mmで平年比103%、横径が46.8mmで平年比101%と平年並みの状況です。

また、満開後日数による比較では、両品種共に平年より大きい状況です。

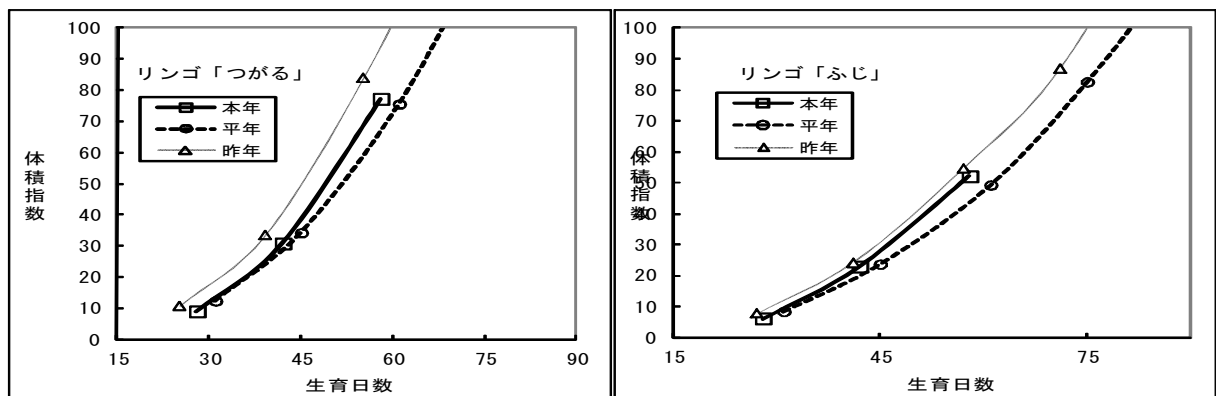


図3 リンゴの果実肥大（7月1日現在）

イ 新梢生長（満開後50日現在）

「ふじ」の新梢長は22.9cmで平年比119%と平年よりやや長く、新梢停止時期は満開後50日で100%に達し、平年並みの状況となっています。また、葉色は平年よりやや濃い状況である。

(4) ブドウ

ア 新梢生長（発芽後60日現在）

「巨峰」（有核栽培）の新梢長は76.5cmで平年比114%と平年より長く、展葉数は14.3枚で平年比109%と多い状況です。

4 栽培管理上の留意点

(1) モモ

ア 早生品種の収穫

収穫前の降雨が多い場合や、核障害により胚に障害を受けた場合は、果肉の成熟が早まり軟化しやすい傾向にありますので、収穫が遅れないよう注意してください。

イ 修正摘果

モモの硬核期がほぼ終了する時期となりましたが、硬核期が終了すると肥大不良果や変形果、核に障害をもった果実などが目立ってきます。今後、中生品種では、修正摘果を数回に分けて丁寧に行いましょう。果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施してください。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」の収穫予測では、収穫開始は平年より8日程度遅れる見込みですが、今後の気温の推移によっては収穫期が前進する可能性があります。「あかつき」等の中生品種は、今月下旬頃から着色期に入るので、夏季せん定、支柱立てや枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に行いましょう。

(2) ナシ

ア 新梢管理

所内の「幸水」では、通常、裂果初発日（果樹研予測：7/21）から3日程度遅れて新梢停止日となります。「幸水」の腋花芽着生向上を目的に新梢誘引を実施する場合、新梢生育が旺盛な時期に新梢誘引を行うと効果的なので、裂果初発予想日の10日前頃が予備枝誘引作業のピークとなるように作業を進めましょう。

また、新梢誘引は腋花芽着生向上のほか、樹体の受光条件向上、薬剤散布の効率化、翌春における長果枝棚付け作業の効率化などの効果も期待できますので、「幸水」以外の品種でも積極的に実施しましょう。

イ 着果管理

仕上げ摘果はできるだけ速やかに終了しましょう。この際、着果過多にならないよう、単位面積あたりの着果量を確認しながら摘果作業を進めてください。なお、裂果期に入った場合は、ほかの果実の裂果発生を助長するおそれがあるのでこの時期の摘果は控え、裂果が収束してから作業を行ってください。

(3) リンゴ

ア 着果管理

7月は花芽分化期に入りますが、仕上げ摘果の遅れは花芽分化率低下の原因となるので、満開60日後（7月上旬）までに仕上げ摘果を終了させましょう（果樹研究所「ふじ」の満開60日後は7月2日）。

仕上げ摘果終了後は、随時修正摘果を実施し、小玉果や変形果、病虫害の被害果、傷果、サビ果等を摘果してください。

イ 枝吊り・支柱立て

果実肥大にともない枝が下垂すると、樹冠内部や下枝に着果した果実は着色不良となりやすいため、樹冠内部の日当たり改善と枝折れ防止のため、支柱立てや枝吊りを実施しましょう。

ウ その他

梅雨期は降水量が多く、湿害の危険性が高まります。土壌の過湿は、葉の褐変や黄変落葉を引き起こす原因となるので、停滞水が発生しやすい園地では排水対策を徹底しましょう。

(4) ブドウ

ア 着房数管理

着房過多は、糖度上昇の遅れ、赤熟れ果の要因となります。また、翌年の生育へも影響することから、ベレーゾン（水回り）期までに着房数の見直しを行い、適正着果量に調整します。「巨峰」や「高尾」では1新梢に2果房ついているものは1果房にし、弱い新梢には着房させないようにしましょう。最終着房数は「巨峰」では3.3m² 当たり9～10房、「高尾」では10～11房を目安にし、樹勢や天候により適宜調整してください。特に、日照不足が続く場合には、着房数の制限が必要です。

イ 摘粒及び袋かけ

摘粒作業では「巨峰」は30～35粒、「高尾」は40～50粒残します。作業時期が遅れると、果粒同士が密着状態となり、ハサミが入りにくくなり、果皮を傷つけ裂果や病害発生の原因となるほか、作業性も低下するので早めに摘粒作業を行いましょう。

摘粒は収穫後の脱粒を防ぐため、密着した円筒形の房型とし、無核果や障害果、内側に入り込んだ果粒や飛び出している果粒を中心に除去してください。なお、この時期以降、果房に触れると果粉（ブルーム）が落ちるため、摘粒の際は穂軸を持って作業し、果房を手で触らないようにしましょう。

摘粒が終わり次第、薬剤散布を行い袋かけを実施しましょう。袋内温度の急激な上昇は日焼け果発生の原因となるので、日中の気温が30℃以上になるような時期の袋かけは避けてください（7月上旬まで袋かけを終了させることが望ましい）。また、袋かけと同時にかさかけを行うと日焼け防止に有効です。なお、ベレーゾン（水回り）期以降は日焼けの発生が比較的少なくなりますので、7月上旬までに袋かけができなかった場合は、ベレーゾン期（7月下旬）以降に行いましょう。

ウ かん水

ベレーゾン期に干ばつ傾向が続く場合は、かん水を実施しましょう。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア リンゴ輪紋病、褐斑病、斑点落葉病

輪紋病は果実、枝梢部ともに感受性が高い時期となります。また、梅雨期間中であり、降雨日が多くなると褐斑病、斑点落葉病の発生にも注意が必要です。7月上旬にいずれの病害にも効果がある薬剤を十分量散布しましょう。

イ モモせん孔細菌病

被害葉、被害果実は二次感染源となるため、見つけしだいせん除して適切に処分するなど、耕種的防除を徹底しましょう。薬剤防除を行う場合は、収穫前日数に十分注意してください。

ウ モモ灰星病・ホモプシス腐敗病

早生種は灰星病の重要防除時期にあたるので、7月上旬および中旬に灰星病防除剤を散布しましょう。中～晩生種では灰星病とホモプシス腐敗病の同時防除が必要となるので、いずれの病害にも効果のある薬剤を十分量散布しましょう。

エ ナシ黒星病・輪紋病

6月29日現在の果樹研究所内（「幸水」、無防除樹）の新梢葉における黒星病の発病葉率は低い状況でしたが、県内の発生量が多い状況であり（病虫害防除所による6月29日付防除情報）注意が必要です。7月上旬、中旬に7～10日間隔で黒星病、輪紋病に効果がある殺菌剤を十分量散布するとともに、黒星病の罹病部位は見つけしだい取り除いてください。

また、輪紋病の重点防除期にもあたるため、多発が予想される場合は梅雨明けまで7日間隔で防除を行いましょう。

オ ブドウ晩腐病・べと病

袋掛け前に薬剤散布を実施し、散布後速やかに袋掛けを行いましょう。有核栽培では、摘粒作業が終わりしだい今回の防除を行いましょう。

(2) 虫 害

ア 主要鱗翅目害虫

現在の主要鱗翅目害虫の発生時期はやや遅く推移しています。フェロモントラップのデータを参考にしながら防除が遅れないように注意しましょう。

イ ナシヒメシンクイ

ナシヒメシンクイ第2世代の防除適期は7月2半旬頃と推定されるため、防除を実施していない場合には速やかに防除を実施してください。本種はモモ等の核果類の新梢伸長が停止するとナシ果実への寄生が増加します。また、高温年では交信かく乱剤のフェロモン成分が急激に揮発するため、7月下旬頃から交信かく乱効果が低下することがあります。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、今回の世代から防除を徹底しましょう。

ウ モモノゴマダラノメイガ

越冬世代の誘殺ピークは6月3半旬頃であったと推定されます。また、本種の誘殺は7月上～中旬に一旦少なくなった後、7月5半旬頃から再び増加します。被害が予想されるモモ園では、7月2半旬頃まで防除を継続しましょう。なお、被害果実は見つけしだい摘除して5日以上水漬けするか、土中深く埋めましょう。

エ モモハモグリガ

第3世代の防除適期は7月3半旬頃と考えられます。本種の発生には無防除のハナモモ園や放任園などが影響していると考えられるため、無防除園の管理や放任園の伐採等を行いましょ。

オ ハダニ類

高温が続く場合はハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当り雌成虫1頭以上）の密度になったら速やかに防除を行いましょ。

カ カメムシ類

園地への飛来状況をよく確認し、飛来が多い場合は防除を徹底しましょ。なお、病害虫防除所から病害虫発生予察情報注意報第3号（果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ））が発表（6月29日付け）されていますので、参照してください。

表1 主要鱗翅目害虫の防除時期の推定（果樹研究所 平成24年7月1日現在）

今後の気温 予測	ナシヒメシンクイ		モモハモグリガ	
	第1世代 成虫盛期	第2世代 防除適期	第2世代 成虫盛期	第3世代 防除適期
2℃高い	7月2日	7月10日	7月9日	7月13日
平年並み	7月1日	7月10日	7月9日	7月14日
2℃低い	7月2日	7月13日	7月12日	7月17日

注) 演算方法は、三角法による。

起算日：ナシヒメシンクイ 5月5日、モモハモグリガ 6月10日

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

<http://www.pref.fukushima.jp/fappi/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょ。